

2019 年度博士論文（要約）

日本語教育実習生のキャリア意識の変容
ー学部日本語教員養成コースへの参加過程の分析からー

桜美林大学大学院 国際学研究科 国際人文社会科学専攻

三枝 優子

目次

第1章	研究の背景	1
1.1	大学教育の転換期	1
1.2	日本語教育における現状と日本語教員養成課程	1
1.3	本研究の目的	2
1.4	本論文の構成	2
第2章	先行研究	4
2.1	キャリアに関する研究	4
2.2	キャリア教育に関する研究	7
2.3	体験型学習に関する研究	9
2.4	教育実習に関する研究	10
2.5	言語教育とアイデンティティ	12
2.6	学習観の変遷	13
2.7	本研究の課題	14
第3章	研究方法と調査概要	16
3.1	研究方法の検討	16
3.2	TEA について	17
3.3	TEM について	18
3.4	TLMG について	20
3.5	調査協力者	21
3.6	調査協力者の背景	21
3.6.1	カリキュラム環境について	21
3.6.2	日本語教員養成コースについて	22
3.6.3	日本語教育実習について	22
3.7	収集データと収集方法	25
3.8	分析方法	25
3.9	倫理的配慮	26
第4章	調査結果と分析	27
4.1	TEM 図による類型化	27
4.2	日本語教員直進型の日本語教員養成コース参加過程	29
4.2.1	スズキの場合	31

4.2.2	ホシノの場合	35
4.2.3	アオキの場合	39
4.2.4	シマダの場合	43
4.2.5	日本語教員直進型の径路	47
4.3	葛藤経験型の日本語教員養成コース参加過程	48
4.3.1	コイワの場合	49
4.3.2	トダの場合	53
4.3.3	ヒヤマの場合	58
4.3.4	サイトウの場合	62
4.3.5	葛藤経験型の径路	66
4.4	学校教員直進型の日本語教員養成コース参加過程	67
4.4.1	オオタの場合	68
4.4.2	キドの場合	72
4.4.3	学校教員直進型の径路	76
4.5	自己目的型の日本語教員養成コース参加過程	77
4.5.1	タダの場合	78
4.5.2	コウノの場合	82
4.5.3	自己目的型の径路	86
4.6	第4章のまとめ	86
第5章	考察－社会的要因の分析から－	88
5.1	日本語教員直進型に見られる社会的要因	88
5.1.1	第Ⅰ期 日本語教員になりたいと思う	
	時期の社会的要因	88
5.1.2	第Ⅱ期 日本語教員になるための実践を積む	
	時期の社会的要因	89
5.1.3	第Ⅲ期 実践を積みながら具体的な将来像を思い描く	
	時期の社会的要因	90
5.1.4	日本語教員直進型における社会的要因に関する考察	91
	(1) 制度的要因	91
	(2) 人的要因	92
	(3) 社会環境的要因	93
5.2	葛藤経験型の社会的要因	99
5.2.1	第Ⅰ期 日本語教員養成コースを知り興味を持つ	
	時期の社会的要因	99

5.2.2 第Ⅱ期 日本語教育実習に参加し日本語教員に 興味を持つ時期の社会的要因	100
5.2.3 第Ⅲ期 他の職業と比べ悩みながら職業を選択する 時期の社会的要因	101
5.2.4 葛藤経験型における社会的要因に関する考察	101
(1) 制度的要因	102
(2) 人的要因	103
(3) 社会環境的要因	104
5.3 学校教員直進型の社会的要因	110
5.3.1 学校教員直進型における社会的要因に関する考察	110
(1) 制度的要因	110
(2) 人的要因	111
(3) 社会環境的要因	111
5.4 自己目的型の社会的要因	115
5.4.1 自己目的型における社会的要因に関する考察	115
(1) 制度的要因	115
(2) 人的要因	116
(3) 社会環境的要因	116
5.5 類型を超えた社会的要因	119
5.6 第5章のまとめ	120
第6章 考察ーキャリア意識変容の分析からー	122
6.1 日本語教員養成コースへの参加過程と キャリア意識の変容	122
6.2 TLMG の図表化について	122
6.3 日本語教員直進型のキャリア意識の変容	123
6.3.1 スズキの場合	123
(1) 教員に関する意味づけの変容	124
(2) 授業に関する意味づけの変容	124
6.3.2 ホシノの場合	126
(1) 海外に関する意味づけの変容	126
(2) 実践共同体参加に関する意味づけの変容	127
6.3.3 日本語教員進型のキャリア意識の変容のまとめ	128
(1) キャリア・モデルとの関わり	128
(2) 実践共同体への参加による評価	129

6.4 葛藤経験型のキャリア意識の変容	130
6.4.1 コイワの場合	130
(1) 教育に関する意味づけの変容	130
(2) 言語に関する意味づけの変容	131
6.4.2 サイトウの場合	133
(1) 教員に対する意味づけの変容	133
(2) 学習者に対する意味づけの変容	134
6.4.3 葛藤経験型のキャリア意識の変容のまとめ	135
(1) 移動による新しい価値づけ	135
(2) 移動による自己への評価の変容	136
(3) 日本語教育に対する新たな意味づけ	137
6.5 学校教員直進型のキャリア意識の変容	139
6.5.1 キドの場合	139
6.5.2 学校直進型キャリア意識の変容のまとめ	140
6.6 自己目的型のキャリア意識の変容	141
6.6.1 タダの場合	141
6.6.2 自己目的型のキャリア意識の変容のまとめ	142
6.7 第6章のまとめ	143
第7章 総合考察	146
7.1 日本語教員養成コースへの参加過程	146
7.2 日本語教員養成コースへの参加過程と社会的要因	146
7.3 日本語教員養成コースへの参加過程とキャリア意識の変容	147
7.4 キャリア教育としての日本語教員養成コース	149
第8章 本研究の意義と今後の課題	152
8.1 本研究の意義	152
8.2 本研究の限界と今後の課題	153
参考文献	-1-
参考資料	I

謝辞

第1章 研究の背景

21 世紀は知識基盤社会と言われ、幅広い知識と柔軟な思考力により主体的に社会参加していくことが求められる。大学教育においてもこのような社会の変化や求められる能力、資質の変化を背景に 2011 年にキャリア教育が義務化された。

大学における日本語教員養成課程は日本語教員という職業に直結する教育課程とも捉えられるが、修了後日本語教員になる卒業生は決して多くはないのが現状である。

そこで、本研究では、日本語教員養成課程を履修し、日本語教育実習に参加した学士課程の学生の大学入学から卒業までの履修選択及び職業選択と、それに伴うキャリア意識の変容に注目した。学生の履修選択及び職業選択に影響を与えた社会的要因や意識を明らかにすることは大学教育の説明責任となり、また日本語教育のみならずキャリア教育及び大学教育に対するプログラム評価にも意義あるものと考ええる。

第2章 先行研究

第2章では、研究課題解明のために、まずキャリア、およびキャリア教育に関する先行研究について概観し、キャリア教育で注目されている体験型学習、教育実習を取り上げた。

キャリアの定義は時代とともに、人の持つ固定的な特性という捉え方から、発達や役割に応じて変容するものへ、そしてライフテーマによって主体的に選択したり、形成したりする個別性、固有性を有するものという捉え方へと変化してきた（渡辺他 2018）。後期近代では職業選択に対して社会的構造による制約が小さくなったためにより個人のエイジェンシーが職業選択に影響を与えるようになり（乾・児島 2014）、学校から仕事への移行の道筋が多様化している（溝上・松下 2014）ことが指摘されている。

日本のキャリア教育は初等・中等教育から開始され、多様で幅広い他者との関わりから労働や社会の仕組みの理解を目指すものとなっている。2011 年には大学教育においてもキャリア教育が義務化された。大学におけるキャリア教育では取組前後の尺度測定によりキャリアに対する態度や自己肯定感、職業観などの変容を言及する研究が散見される（中間 2008、高橋・山口 2012、梅沢・田澤 2013 など）。教育実習についても教育実習の経験が教師観やこども観に影響を与えることを量的研究により指摘している（貫井他 2001、西松 2008、三島 2007,2009 など）。しかし、個別性、固有性を有するキャリアを捉えるには質的研究からの視点も必要であり、また、意識変容だけでなくそれに伴う行動変容や職業選択も分析、考察の範囲に含める必要がある。

日本語教育実習は、初等・中等教育現場での実習（以下学校教育実習とする）と異なり実習期間や対象学習者、実習受け入れ機関などが多様である。また異文化との接触や移動が伴う。これに関連し、言語教育とアイデンティティに関する視点も求められる。学習観の変遷

にも言及したうえで本研究は社会文化的アプローチの視点に立つこととした。そして、本研究におけるキャリアを「職業生活上の役割も含みながらも、生涯における自己の生き方に対する意味づけ、価値付けも含む広義なもの」と定義し、研究課題を提示した。

研究課題は(1)日本語教育実習生はどのように日本語教員養成課程へ参加したのか。その参加を促したものは何か、(2)日本語教員養成課程に参加することでどのようなキャリア意識の変容があったのか、という2点である。

第3章 研究方法と調査概要

第3章では本研究で用いる複線径路等至性アプローチ (Trajectory Equifinality Approach: 以下 TEA とする) について詳述した。TEA は時間が持続する中での対象や現象の変容プロセスを捉え、社会的要因を分析対象とすることが可能である。TEA の中心的概念である複線径路等至性モデル (Trajectory Equifinality Model: 以下 TEM とする) では、ある地点からある地点までの径路を TEM 図により描き、複数の質的データであっても1つの図表にコンパクトに可視化できるという特徴がある。

調査協力者は首都圏にある A 大学文学部に在籍し、日本語教員養成課程 (以下 A 大学日本語教員養成課程を日本語教員養成コースとする) を修了した学士課程の学生 12 名である。A 大学の学習環境については、教職を目指す学生が多いこと、文学部においては、教職コース及び日本語教員養成コース、図書館司書コースなど資格取得コースが複数あり、入学後にコース登録を行うことを述べた。また日本語教員養成コースにおいては、主専攻と副専攻があり、主専攻では 1 科目以上の日本語教育実習が必須となっていること、日本語教育実習は海外実習 2 つ、国内実習 (学外) 1 つ、国内実習 (学内) 3 つの合わせて 6 つのプログラムが実施されていることを説明した。

データは TEM の方法に準じ一人 2 回から 3 回の半構造化インタビューにより収集した。

第4章 調査結果と分析

第4章では、TEM を用い履修選択と職業選択の視点から調査協力者 12 名の大学入学から卒業に至るまでの径路を TEM 図に描き類型化した。その結果、調査協力者の大学入学から日本語教員養成コース修了、即ち大学卒業までの履修選択及び職業選択の径路は 4 つの径路に類型化された。

1 つめは、入学前または入学直後から日本語教員を目指して日本語教員養成コースに参加をし、日本語教員となった「日本語教員直進型」である。この径路型の共通点は、参加した複数の日本語教育実習の種類や順序には多様性が見られるが、将来像は一貫して日本語教員だった点である。

2 つめは「葛藤経験型」である。この径路型は日本語教員養成コースに参加したことで入学前には想定していなかった日本語教員を職業選択肢として考えるようになり、悩みながら職業を選択する径路を辿る。共通点として複数の日本語教育実習履修が挙げられるが、卒業後の径路は日本語教員と学校教員とに分かれている。

3 つめは入学前から学校教員を目指し学校教員となった「学校教員直進型」である。キャリア形成の中心的な活動として日本語教員養成コース以外の活動が存在するが、そこでの自己効力感の高まりの中で日本語教育実習が選択されているという共通径路が見られた。

4 つめは職業とは関連性の薄い自己の目的達成のためにコースを履修した「自己目的型」である。各自の課題が異なるため、参加した日本語教育実習や履修時期には異なりがあるが、一般企業等への就職活動への影響を考慮した径路選択となっている点に共通性が見られた。

この 12 名の類型化した TEM 図から日本語教員となる径路の分岐点は、「4 年次前に日本語教育実習に参加する」とことと「積極的に複数の実習に参加する」ことの 2 点であると捉えられた。即ち、日本語教員になった調査協力者は、4 年次前に日本語教育実習に参加し、その後積極的に複数の日本語教育実習に参加をしたという共通した径路を有していることが明らかになった。ただし、同様の径路を辿った調査協力者であっても、葛藤の末、学校教員を選択した葛藤経験型に属する者や、日本語教員を将来像とすることはなく一般企業に就職した自己目的型に属する者もいた。これは経験から生成されるキャリア意識の変容が、個別的、固有的なものであることを支持するものである。

また、多様な径路を描いた 12 名の TEM 図において、全員が通過した必須通過点は、履修制度上の「履修ガイダンス」と「コース登録」の 2 点が設定できた。

そして、この類型化から、日本語教員養成コース履修者は日本語教員を目指す学生だけではないこと、コース履修途中から日本語教員志望に変わる学生がいることが履修選択の径路とともに可視化できた。

第 5 章 考察－社会的要因の分析から－

第 5 章では、「日本語教育実習生はどのように日本語教員養成課程に参加したのか。その参加を促したものは何か」という研究課題（1）の解明のため、類型別に TEM 図に表れた社会的要因の分析、考察を行った。

その結果、社会的要因は大学の履修制度や教員採用試験などの「制度的要因」、家族や教員、学習者などの「人的要因」、経済的要因や就職に対する言説などの「社会環境的要因」および「その他」に大別することができることを指摘し、それぞれの類型別に特徴について論じた。

日本語教員直進型では、「制度的要因」として自由意思による複数のコース選択、履修科目選択が保証されている履修制度に注目した。日本語教員直進型にとって、教職コースとの

同時履修が可能であるという制度的要因は、その履修の選択、継続を意味づけることで自身の日本語教員コースへの向き合い方を問い、将来像を具体化する文脈を形成していた。また複数の日本語教育実習の履修選択は各自が認識した異なる課題の解決の場となっていた。自由に選択できるコースや実習は、学習機会に主体的にかかわるプロセスを保証している。これは、主体的に学習機会を選択し、実践共同体にかかわるという自己決定型学習の要素を含む社会的要因となっていることを指摘した。「人的要因」については、身近な日本語教員や実習の先輩などが挙げられた。彼らは調査協力者自身の将来像を投影するキャリア・モデルとなっているだけでなく、円滑な実践共同体への参加が可能となるよう、情報提示の調整や支援を行い、日本語教員になる径路をスキャフォールディングにより導いていることを述べた。

次に、葛藤経験型では「制度的要因」として、日本語教育への興味関心に関係なく、コース概要を周知する履修ガイダンスと登録後に取り消し可能なコース登録制度が挙げられた。ガイダンスは入学直後の全学生を対象とすることで日本語教員志望以外の学生にも日本語教員養成コースを認識させ、単位取得や登録制度の情報を与え、具体的な大学入学から卒業までの履修径路の見通しを可能にする。この要因は葛藤経験型だけでなく学校教員直進型や自己目的型においても見られ、日本語教員養成コースへのアクセスを容易にする促進要因となっていた。「人的要因」は時間の流れとともに、家族などの身近な人物から日本語教育実習で関わる人々へと変化が見られた。日本語教育実習後は、日本語教育実習で関わる多様な人々が挙げられた。多様な立場からの教育文化に根差した視点からの評価や反応が日本語や日本語教育に対する評価に新しい意味づけを可能にし日本語教員養成コース履修の継続を促進していた点に特徴が見られた。「社会環境的要因」としては就職に対するいくつかの言説が挙げられた。職の安定性及び雇用状況などの職業に対する社会的評価、日本語教員就職に関する情報へのアクセスの難しさなどの「社会環境的要因」は阻害要因としても捉えられるが、それらの要因により日本語教員への径路が断念されるのではなく、具体的な情報の収集などより積極的な行動によって課題を解決しようとする方向付けともなっていた。

学校教員直進型では、それぞれの協力者には日本語教育以外にキャリア形成につながる中心的活動があり、その周辺の活動として日本語教育実習は位置づけられた。そのため、中心的活動を阻害しない行動的、心理的及び時期的なアクセスの容易さが見通せる社会的要因により日本語教育実習や日本語教員養成コースへの参加が促進されると結論付けられた。

自己目的型では、「制度的要因」として日本語教員になることだけを目的としない大学の授業という側面が、キャリア形成ではなく自己アイデンティティの反映のための履修であっても十全の参加が可能となり、参加を促すことを指摘した。

ただし、それぞれの要因は各類型に独立して存在するものではなく、履修ガイダンスなどに見られるように他の類型にも共通の要因として存在しているものもある。「その他」の要因として取り上げたりアリティ・ショックもそうである。高校から大学への移行をとまなう

学業的リアリティ・ショックは類型に関係なく見られた社会的要因であるが、このリアリティ・ショックの経験が次の径路模索を促し、日本語教員養成コース参加への後押しとなることを事例とともに記述した。

第6章 考察ーキャリア意識変容の分析からー

第6章では、「日本語教員養成課程に参加することでどのようなキャリア意識の変容があったのか」という研究課題(2)を解明するため、TEAのTLMG(Three Layers Model of Genesis)を用い、4年間のキャリア意識の変容を考察した。

履修目的や経験の共通性から類型別にキャリア意識の変容を詳述したが、キャリア意識及びその変容は個別性、固有性を支持するものであった。しかし、日本語教員養成コースの特徴による意識変容として次の点が指摘できた。

まず、4年間のコースという継続するカリキュラムによる特徴である。継続するコース内には複数の身近なキャリア・モデルが存在し、その時々での接近を可能にしていた。キャリア発達とともにメンターやメンターの行為に対する評価も変容する事例を提示し、複数のキャリア・モデルやメンターとの相互行為の重要性とともに同一の人的要因と長期間、関わることでキャリア意識の変容が促されることを指摘した。同様に、複数の異なる日本語教育実習への参加経験の蓄積によって教授法などに対する評価が次第に変容する事例をあげ、複数回にわたる多方面からの促進的記号により意識が変容することを述べた。

次に、日本語教育実習が学内だけではなく、学外や海外で行われることから、異文化接触による新しい視点の獲得がキャリア意識にも影響を与えていることを事例とともに示した。

また、日本語教育実習は教育的文脈の中で十分に考慮された計画により実施されており、活動に対し複数の立場からの言語化された評価が多用される構造を持つ。この教育的文脈の中で行われる評価が実習生に自己効力感を感じさせ、自己評価及びキャリア意識の変容へとつながっていることが明らかになった。そして、多様な立場からの評価は学習者をはじめとする他者理解と自己理解を促し、多文化共生を視野に入れた地球市民性の滋養を促すものとなるを考える。

本研究では4年間を対象としたことで日本語教育実習だけでなく、学校教育実習やサークル活動など複数の実践共同体に関わりながら変容していくキャリア意識を具体的文脈とともにとらえることができた。

第7章 総合考察

第7章では、本研究の分析結果をまとめ、本研究で得た知見をもとに今後の日本語教員養成コースの在り方を含めキャリア教育としての日本語教員養成コースについてカリキュ

ラム評価的視点から提言を試みた。

まず、大学教育における日本語教員養成課程は、日本語教員の養成だけに留まらず、地球市民性の涵養等広くキャリア教育の場として位置づけられることが本研究の結果からも支持された。それは日本語教育実習が大学における教育文脈と重なりを持ちながらも社会とつながる実践活動となっているためである。そのため、日本語教育実習は制度的、教育的に十分考慮されたプログラムとする必要性を主張した。

次に、キャリア・モデルやメンターとなる実践共同体内の構成員の重要性を述べた。長期間にわたるアクセスが容易に可能な構成員の配置とともにキャリア・モデルやメンターになりうる構成員の情報収集や情報交流もプログラム設計者には必要な視点になる。

また、カリキュラム上の開講時期についても言及した。本研究の結果から、日本語教員の養成に比重を置くのであれば、就職活動が本格化する前に日本語教育に興味を持たせ、次の日本語教育実習の履修という径路を提示できることが重要である。そして目的の異なる複数の日本語教育実習の時期をずらして開講することが多様なキャリア・モデルとの接触という観点から望ましい。

最後に、コースや日本語教育実習に対するアクセスについても指摘した。本研究からは、ガイダンスにより単位認定と卒業までの見通し、他のコースとの共通性の認識、学びを視覚化する証明書の存在などが、日本語教育への興味関心を超えてコース登録への径路選択を促していることが明らかになった。コース登録者を日本語教員志望者に限定しないことで、のちに日本語教員志望者となる可能性のある履修生が参加できるだけでなく、リアリティ・ショックを受け新しい径路を模索している学生にも道を開くことになる。

日本語教育実習へのアクセスについては海外実習では経済的負担の軽減のための費用支援、精神的な負担軽減のための引率者の同行、魅力のある実習地選定などが、国内実習では他の実習生とのつながりや学習者との関係構築などが促進要因となる可能性が指摘できる。

A 大学の日本語教員養成課程は、入学後に選択するコース制であり、コース登録後も登録取消が可能であり、日本語教育実習も自由選択である。このような履修者による自由選択は、選択に対する意味づけを常に問い、選択の先にある未来を想像させる。自己の将来の可能性を自己の履修選択により模索する行為は自律的なキャリア構築を促進する。日本語教育実習及び日本語教員養成コースは、大学のキャリア教育に大きな役割を担うプログラムとして評価できるものとする。

第 8 章 本研究の意義と今後の課題

第 8 章では本研究の意義と限界、今後の課題を述べた。本研究の意義は大学における 4 年間の正課授業活動を対象とし、その中で変容する個別性、固有性のあるキャリアを具体的に捉えた点と、キャリア支援教育としての履修制度やカリキュラムの在り方の検討の可能性

を示すことができた点である。

本研究の限界としては、調査協力者が限られており、数量的多数である日本語教員養成コース副専攻者や、途中でコース履修を放棄したものなど多様な学生の選択径路を描き切れなかった点である。

今後の課題としてはよりマクロな視点から修了生を対象とした考察やよりミクロな観点から日本語教育実習における実習生の径路選択や社会的要因の分析による日本語教育実習の内容や方法の検討などが挙げられた。

参考文献

- 浅井亜紀子 (2006),異文化接触における文化的アイデンティティのゆらぎ, ミネルヴァ書房
- 安達智子(2001),大学生の進路発達過程 -社会・認知的進路理論からの検討-, 教育心理学研究, 49, pp326-336
- 安達智子 (2004) 大学生のキャリア選択ーその心理的背景と支援ー, 日本労働研究雑誌, 533 pp27-37
- 荒井聖司朗・辻河昌登 (2012) ,ある非教職志望の教育実習生の語りにみる 教育実習の意味に関する研究, 学校教育学研究, 24, pp57-65
- 荒川歩・安田裕子・サトウタツヤ (2012) , 複線径路・等至性モデルの TEM 図の描き方の一例, 立命館人間科学研究, 25, pp95-107
- 有村勇紀 (2017) ,教育実習における学生の経験と進路認識変化ー志望度・自信の変化に着目した質的研究ー, 教育デザイン研究, 8, pp42-51
- 池田広子(2007),日本語教師教育の方法ー生涯発達を支えるデザイン, 鳳書房
- 池田広子・朱桂栄 (2017) , 実践のふり返りによる日本語教師教育ー成人学習論の視点からー, 鳳書房
- 石川良子・西倉実季 (2015) ,ライフストーリー研究に何ができるか,桜井厚・石川良子編 , ライフストーリー研究に何ができるか 対話的構築主義の批判的継承, 新曜社, pp1-20
- 石黒香苗 (2016) ,希望通りでない就職決定までの将来像変容プロセスの質的検討ー文系大学生における就職活動に着目してー, 青年心理学研究, 28(1), pp1-15
- 石黒香苗 (2017) ,希望通りでない一般企業へ就職をした大学新卒者の主観的体験プロセスー進路への納得に至るプロセスに着目してー, 産業・組織心理学研究, 31 (1), pp55-67
- 石黒広昭編 (2004) ,社会文化的アプローチの実際ー学習活動の理解と変革のエスノグラフィー, 北大路書房
- 乾彰夫・児島功和 (2014) , 後期近代における<学校から仕事への移行>とアイデンティティ『媒介的 コミュニティ』の課題, 溝上慎一・松下佳代編, 高校・大学から仕事へのトランジション変容する能力・アイデンティティと教育, ナカニシヤ出版, pp215-236
- 岩井貴美 (2017) , 大学1年生の学業に対するリアリティショック状態における職業意識と学ぶ意欲の関連性, 近畿大学商学論究,15(2),16(1)合併号, pp23-33
- 岩田昌太郎・嘉数健悟 (2008) , 教育実習における評価規準の項目に関する研究, 広島大学大学院教育学研究科紀要, 57, pp293-300

- ヴィゴツキー (2001), 新訳思考と言語, 柴田義松訳, 新読書社
- 上田勝江 (2013), 専門学校生のキャリア意識の研究ー再チャレンジ戦略に注目してー, 大阪大学教育学年報, 18, pp63-78
- 梅崎修・田澤実編著 (2013), 大学生の学びとキャリア 入学前から卒業後までの継続調査の分析, 法政大学出版局
- 浦上昌則 (1994), 女子学生の学校から職場への移行期に関する研究ー「進路選択に対する自己効力」の影響ー, 青年心理学研究, 6, pp40-49.
- 浦上昌則 (1996a), 「進路選択に対する自己効力」の育成に関する予備的研究ーワークブックを用いた育成法についてー, 進路指導研究, 17 (1), pp17-27.
- 浦上昌則 (1996b), 女子短大生の職業選択過程についての研究ー進路選択に対する自己効力, 就職活動, 自己概念の関連からー, 教育心理学研究, 44 (2), pp195-203.
- 浦上昌則 (2016), 就職活動と職業観の変容, アカデミア 人文・自然科学編, 12, pp53-65
- 浦上昌則 (2017), 学生の職業的アイデンティティの検討ー30年前との比較を通してー, アカデミア人文・自然科学編, 13, pp71-84
- 大谷尚 (2008) 4ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案ー着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続きー, 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (教育科学), 54-2, pp27-44
- 岡崎敏雄・岡崎眸 (1997), 日本語教育の実習ー理論と実践ー, アルク
- 岡本佐智子 (2005), 日本語教師養成の現状と課題, 北海道文教大学論集, 6, pp121-135
- 奥田純子 (2011), 日本語教師のキャリア形成ー日本語教育機関の教師へのインタビューを手がかりにー, 異文化間教育, 33, pp60-80
- 香川秀太・青山征彦 (2015), 越境する対話と学び 異質な人・組織・コミュニティをつなぐ, 新曜社
- カッティング美紀 (2016) 国際教育の学びの質保証: 本学の海外プログラムにおけるアセスメントと学習成果, 大学教育学会誌, 38(2), pp67-76
- 加藤理恵 (2011), 学部生による日本語教育実習での学びの過程, 鹿児島純心女子大学国際人間学部紀要, 17, pp59-76
- 金井壽宏 (2002), 働く人のためのキャリア・デザイン, PHP 研究所
- 河井亨 (2014) 大学生の学習ダイナミクス 授業内外のラーニング・ブリッジング, 東信堂
- 河井亨・溝上慎一 (2012), 学習を架橋するラーニング・ブリッジングについての分析ー学習アプローチ, 将来と日常の接続との関連に着目してー, 日本教育工学会論文誌, 36 (3), pp217-226.
- 川上侑雄 (2009), 海の向こうの「移動する子どもたち」と日本語教育ー動態性の年少者日本語教育学, 明石書店

- 川上侑雄 (2010), 「移動する子どもたち」と言語教育—ことば,文化,社会を視野に,佐々木倫子,砂川裕一,門倉正美,細川英雄,川上侑雄,牲川波都季編, 変貌する言語教育—多言語・多文化社会のリテラシーとは何か, くろしお出版, pp85-106
- 川越菜穂子 (1999) 大学副専攻における日本語教育実習について,吉田彌壽夫先生古稀記念論集編集委員会,日本語の地平線 吉田彌壽夫先生古稀記念論集, pp59-70, くろしお出版
- 川本静香 (2019), KJ 法とは,木戸彩恵,サトウタツヤ編 (2019) 文化心理学, ちとせプレス, pp233-242
- 北出慶子 (2013), 相互文化グループ学習活動におけるアイデンティティ形成の学び 正課授業における相互文化学習活動の実践分析, 言語文化教育研究, 11, pp282-305
- 北出慶子 (2018), 韓国・中国留学経験の意味づけと就職活動—言語資本から非英語圏留学の学びを考える—, 立命館経営学, 56(5), pp115-135
- 木戸彩恵・サトウタツヤ編 (2019), 文化心理学—理論・各論・方法論, ちとせプレス
- グレイザー, B & ストラウス, A. L (1996), データ対話型理論の発見—調査からいかに理論をうみだすか, 後藤隆, 大出春江, 水野節夫訳, 新曜社
- 厚生労働省 大学等におけるキャリア教育プログラム
https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/koyou_roudou/shokugyounouryoku/career_formation/career_consulting/career_kyouiku_programs/index.html
 (2019.08.30)
- 厚生労働省 大学におけるキャリア教育の内容と課題
<https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11800000-shokugyounouryokukaihatsukyoku/0000090850.pdf> (2019.08.30)
- 香曾我部琢・松延毅 (2014), 公立保育所保育士の成長プロセスと実践コミュニティ：グラウンデッド・セオリー・アプローチ (GTA) と複線径路・等至性モデル (TEM) の比較から, 宮城教育大学紀要, 48, pp167-180
- 子島進・藤原孝章 (2017), 大学における海外体験学習への挑戦, ナカニシヤ出版
- 児玉真樹子 (2016), 教育実習でのリアリティショックにおけるメンタリングのキャリア発達促進効果, キャリア教育研究, 34, pp31-40
- 児美川孝一郎 (2013), キャリア教育のウソ, 筑摩書房
- 戈木クレイグヒル滋子 (2016) グラウンデッド・セオリー・アプローチ 改訂版 理論を生みだすまで, 新曜社
- 三枝優子 (2014), 大学教育における日本語教育実習とは—海外実習の報告書の分析から—, 桜美林言語教育論叢, 10, pp55-70
- 三枝優子 (2016a), 日本語教育実習に参加した学生の参加過程と意識変容, 大学日本語教員養成課程研究協議会論集, 13, pp 21-30

- 三枝優子 (2016b) ,経験学習の視点から見る日本語教育実習,文教大学文学部紀要, 30(1), pp75-98
- 境愛一郎・中西さやか・中坪史典 (2012) ,子どもの経験を質的に描き出す試み－M-GTA と TEM の比較－, 広島大学大学院教育学研究科紀要, 61, pp197-206
- 坂本麗香 (2013) ,キャリアモデルの探索と形成にむけて－女子大学におけるキャリアモデルレポートの実践から－, 名古屋女子大学紀要, 59, pp87-97
- 桜井厚・石川良子編 (2015) ,ライフストーリー研究に何ができるか 対話的構築主義の批判的継承, 新曜社
- 佐藤慎司・熊谷由里編 (2011) ,社会参加をめざす日本語教育－社会に関わる、つながる、働きかける－, ひつじ書房
- サトウタツヤ編著 (2009) ,TEM ではじめる質的研究－時間とプロセスを扱う研究をめざして, 誠信書房
- サトウタツヤ(2015a),複線径路等至性アプローチ (TEA) ,安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ編,TEA 理論編 複線径路等至性アプローチを活用する, 新曜社, pp4-8
- 澁谷由紀 (2019) ,大学生がインターンシップ経験とアルバイト経験から得た学びについての一考察, キャリア教育研究, 37, pp55-66
- 下田真梨子 (2014) ,看護師の離職に関する文献検討, 高知大学看護学会誌, 8(1), pp29-38
- 白井利明 (2009) ,大学から社会への移行における時間的展望の再編成に関する追跡的研究 (VI) －大卒 8 年目のキャリア発達と時間的展望－, 大阪教育大学紀要, 57(2) pp101-112
- 鈴木えり子 (2014) ,若者へのキャリア・コンサルティングにおける情報提供の有効性について －学校領域を中心にした一考察－, 法政大学キャリアデザイン学部紀要, 11, pp183-213
- 鈴木寿子 (2011) ,共生日本語教育実習によって見出される教室・自他・社会の視座：実習生の内省レポートの分析から, 言語文化と日本語教育, 42, pp31-40
- 白木みどり (2010) ,キャリア教育にかかわる価値観形成についての一考察, 上越教育大学研究紀要, 29, pp75-86
- 高井かおり (2019) ,日本語教師の葛藤とキャリア形成－元日本語教師のライフストーリーから－,明星大学研究紀要人文学部, 55, pp1-16
- 高崎美佐・武石恵美子 (2017) ,大学のキャリア教育が学生のキャリア意識に及ぼす影響,生涯学習とキャリアデザイン, 15(1), pp133-147
- 高橋美穂・山口陽弘 (2012) ,教員養成課程の学生のキャリア意識の実態とその問題点の検討 －学部学生の教職に対する素朴概念を中心に－, 群馬大学教育学部紀要人文社会学編, 61, pp209-218

- 高村和代 (1997a) ,進路探求とアイデンティティ探求の相互関連プロセスについて－新しいアイデンティティプロセスモデルの提案－, 名古屋大学教育学部紀要心理学, 44, pp177-189
- 高村和代 (1997b) , 課題探求時におけるアイデンティティの変容プロセスについて, 教育心理学研究, 45(3) ,pp243-253
- 高村和代 (2001) ,教育実習が職業意識およびアイデンティティに及ぼす影響に関する探索的研究－幼稚園実習直後に着目して－,岐阜聖徳学園大学短期大学部紀要, 33, pp65-75
- 武田知子 (2013) , 恵泉女学園大学日本語教員養成課程における学生の学び, 恵泉女学園大学紀要, 25, pp177-188
- 田澤実・梅崎修 (2017) , キャリア意識と時間的展望－全国の就職活動生を対象にした自由記述分析－, キャリア研究, 35, pp47-52
- 館岡洋子編 (2015) ,日本語教育のための質的研究入門 学習・教師・教室をいかに描くか, ココ出版
- 千島雄太(2015),青年期における自己変容のメリット・デメリット予期に伴う葛藤－学校段階による比較－, 発達心理学研究, 26(1), pp1-12
- 富谷玲子 (2007) , 海外日本語教育実習における実習生の学び－国内日本語教育実習との比較から－, 日本語教育方法研究会誌, 14, pp60-61
- 徳井厚子 (2002) ,短期語学研修におけるコミュニケーション意識とイメージの変化・ユタ大学短期 英語研修プログラムの事例, 信州大学教育学部 紀要, 107, pp.25-33
- 豊田香 (2015) ,専門職大学院ビジネススクール修了生による生涯学習型職業アイデンティティの形成：TEA 分析と状況的学習論による検討,発達心理学, 26(4), pp344-357
- 中間玲子 (2008) , キャリア教育における教育効果の検討－キャリアに対する態度と自己の変化に注目して, 京都大学高等教育研究, 14, pp45-57
- 中原淳・溝上慎一 (編) (2014) ,活躍する組織人の探究－大学から企業へのトランジション－, 東京大学出版会
- 中山亜紀子 (2007) 韓国人留学生のライフストーリーから見た日本人学生との社会的ネットワークの特徴－「自分らしさ」という視点から, 阪大日本語研究, 19, pp97-127
- 中山京子・東優也 (2017) ,海外体験学習における学びの変容と市民性,大学における海外体験学習への挑戦, ナカニシヤ出版, pp60-75
- 西口光一 (1999) , 状況的学習論と新しい日本語教育の実践, 日本語教育, 100, pp7-18
- 西口光一編著 (2005) ,文化と歴史の中の学習と学習者 日本語教育における社会文化的パースペクティブ, 凡人社
- 西松秀樹 (2008) , 教師効力感, 教育実習不安, 教師志望度に及ぼす教育実習の効果, キャリア教育研究, 25, pp89-96

- 日本キャリアデザイン学会監修 (2014), キャリアデザイン支援ハンドブック, ナカニシヤ出版
- 貫井正納・市川洋子・吉田雅巳 (2001), 教育実習前後における学生の授業意識－アンケートによる調査から－, 千葉大学教育学部研究紀要, 49, pp109-114
- 根本浩行 (2012), 第二言語習得研究における社会文化的アプローチ, 金沢大学言語文化論叢, 16, pp19-38
- 畑野快 (2010), アイデンティティ形成プロセスについての一考察－自己決定を指標として－, 発達人間学論叢, 13, pp31-38
- 畑野快・溝上慎一 (2013), 大学生の主體的な授業態度と学習時間に基づく学生タイプの検討, 日本教育工学会論文誌, 37 (1), pp13-21.
- 畑野快・上垣友香理・星野聡孝・高橋哲也 (2019), 学士課程教育における学生の成長観の軌跡とその特徴－入学してからのリテラシーとコンピテンシーの伸びに着目して－, 大学教育学会誌, 40 (2), pp18-26
- パトリシア.A.クラントン著 入江直子・豊田千代子・三輪建二訳 (1999) おとなの学びを拓く－自己決定と意識変容をめざして, 鳳書房
- 半澤礼之 (2007), 大学生における「学業におけるリアリティショック」尺度の作成, キャリア教育研究, 25(1), pp15-24
- 半澤礼之 (2011), 大学生の学びとキャリア意識の発達－大学での学びによる発達を前提としたキャリア研究という視点－, 心理科学, 32 (1), pp22-29
- バンデュラ.A 本明 寛他 (訳) (1995), 激動社会の中の自己効力, 金子書房
- 平尾元彦・田中久美子 (2017), 大学生の就職活動とインターンシップ－多様化の時代の計測課題を追って－, 大学教育, 14, pp.24-36
- 平畑奈美 (2009), 「多様化への対応」に向けた日本語教師養成の課題－日本の日本語教師養成の現状分析から－, Journal CAJLE, 10
- 古市由美子 (2005), 多言語多文化共生日本語教育の意味づけ－実習生の『語り』を通して－, 日本語教育論集, 21, pp23-34
- 古田克利 (2014), インターンシップ実習中の自律性充足が大学生のキャリア自己効力感に及ぼす影響, インターンシップ研究年報, 17, pp1-10
- 古田克利 (2018), 学生生活の意味深さと職業観およびキャリア意識との関連－人文系初年次学生を対象として－, キャリア教育研究, 37, pp1-10
- 古野庸一 (1999), キャリアデザインの『必要性』と『難しさ』, Works, 8-9月号, pp.4-7, リクルートワークス研究所
- 古別府ひづる (2011), 大学日本語教員養成における海外日本語アシスタントの「社会人基礎力」の検証, インターンシップ研究年報, 14, pp27-34

- 文化庁 (2004)「平成 16 年度国内の日本語教育の概要」
http://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/9218806/www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/jit-taichousa/h16/gaiyou.html (2018.11.06)
- 文化庁 (2018)「日本語教育人材の養成・研修の在り方について (報告)」
http://www.bunka.go.jp/koho_hodo_oshirase/hodohappyo/1401908.html (2018.11.06)
- 文化庁 (2019)「日本語教育人材の養成・研修の在り方について (報告) 改定版」
https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/hokoku/pdf/r1393555_03.pdf (2019.9.10)
- 堀越弘・渡辺三枝子 (2006) ,成人前期におけるキャリア環境変化対応性への影響要因－生涯キャリア発達の視点に立って－, 経営行動科学, 19(2), pp163-174
- 保田江美・溝上慎一 (2014),初期キャリア以降の探究－「大学時代のキャリア見通し」と「企業におけるキャリアとパフォーマンス」を中心に,中原淳・溝上慎一(編),活躍する組織人の探究－大学から企業へのトランジション－,東京大学出版会 ,pp139-173
- マーク・L・サビカス著,乙須敏紀訳(2015), サビカスキャリア・カウンセリング理論 「自己構成」によるライフデザインアプローチ,福村出版
- 松坂暢浩 (2017),低学年向け中小企業インターンシップ参加者の追跡調査－早期のインターンシップ体験が与える影響についての考察－, 山形大学高等教育研究年報, 10, pp31-36
- 松下佳代 (2014) , 大学から仕事へのトランジションにおける<新しい能力>その意味の相対化, 溝上慎一・松下佳代編, 高校・大学から仕事へのトランジション 変容する能力・アイデンティティと教育, ナカニシヤ出版, pp91-117
- 三島知剛(2007),教育実習生の実習前後の授業・教師・子どもイメージの変容, 日本教育工学会論文誌, 31(1), pp107-114
- 三島知剛(2009),教育実習中の他者との関わりと教育実習生の授業・教師・子どもイメージ, 授業観察力の変容, 日本教育工学会論文誌, 33(1) , pp71-81
- 三島知剛, 安立大輔, 森敏昭(2009),教育実習生の実習前後における学習の継続意志の検討 , 日本教育工学会論文誌, 33, pp69-72
- 三島知剛, 井上菜美, 森敏昭(2011), 教職志望学生の教職意識と小学校時代における教師からの被教育体験への認知との関係：学部1年生と3年生の差異に着目して, 日本教育工学会論文誌, 35 (4), pp345-356
- 溝上慎一 (2008) ,自己形成の心理学－他者の森をかけ抜けて自己になる－, 世界思想社
- 溝上慎一 (2009) ,「大学生活の過ごし方」から見た学生の学びと成長の検討－正課・正課外のバランスのとれた活動が高い成長を示す－, 京都大学高等教育研究, 15, pp 107-118

- 溝上慎一 (2014) ,アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換, 東信堂
- 溝上慎一・中原淳・舘野泰一・木村充 (2012)仕事のパフォーマンスと能力業績に及ぼす学習・生活の影響ー学校から仕事へのトランジション研究に向けてー,大学教育学会誌, 34 (2), pp139-148.
- 溝上慎一・中間玲子・畑野快 (2016), 青年期の自己形成活動が時間的展望を介してアイデンティティ形成へ及ぼす影響,発達心理学研究, 27(2), pp148-157.
- 溝上慎一・松下佳代編 (2014) 高校・大学から仕事へのトランジション 変容する能力・アイデンティティと教育, ナカニシヤ出版
- 箕曲在弘 (2017) 海外スタディツアーにおける授業づくり アクティブラーニングにおける「関与」を中心に, 子島進・藤原孝章編, 大学における海外体験学習への挑戦, ナカニシヤ出版, pp26-42
- 宮下治 (2018) ,開放制の教員養成と教職大学院とを接続させるカリキュラム開発を目指した学生の意識調査研究, 明治大学教職課程年報 , (40), pp61-68,
- 宮本真由美 (2013) ,日本語教育実習生の受け入れと課題,大学日本語教員養成課程研究協議会論集,6, pp21-25
- 三代純平 (2011) ,言語教育とアイデンティティの問題を考えるために, 言語教育とアイデンティティーことばの教育実践とその可能性, 細川英雄編, 春風社
- 室雅子(2012), ライフコース選択へのキャリアモデルインタビューの有効性, 教育学部紀要, 5, pp 125 - 136
- 文部科学省 キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協議会会議 (2004)「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書 ー児童生徒一人一人の勤労観, 職業観を育てるためにー」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/023/toushin/04012801.htm
(2019.08.30)
- 文部科学省 (2019)「平成 29 年度大学等におけるインターンシップ実施状況について」
http://www.mext.go.jp/b_menu/internship/1413929.htm (2019.08.30)
- 文部科学省 平成 17 年の中央教育審議会答申「我が国の高等教育の将来像」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/attach/1335580.htm
(2019.08.30)
- 文部科学省 国立の教員養成大学・学部及び国私立の教職大学院の平成 30 年 3 月卒業者及び修了者の就職状況等について
http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kyoushoku/kyoushoku/1413296.htm
(2019.08.30)
- 文部科学省 中学校職場体験ガイド
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/career/05010502/026.htm (2019.08.30)

- 安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ編 (2015a) ,TEA 実線編 複線径路等至性アプローチを活用する, 新曜社
- 安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ編 (2015b) ,TEA 理論編 複線径路等至性アプローチの基礎を学ぶ, 新曜社
- 安田裕子 (2015b) 等至性と複線径路, 安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ編, TEA 理論編 複線径路等至性アプローチを活用する, 新曜社, pp30-40
- 柳田直美 (2015,) ,日本語教育実習にける実習生の学びを促す内省プログラムの開発ー録画資料を積極的に活用した内省プログラムの試案-, 一橋日本語教育研究 3, pp13-23
- 山下隆史 (2005) ,学習を見直す, 文化と歴史の中野学習と学習者, 西口光一編著, 凡人社, pp6-29
- 山本晋也 (2011)「教育実習に見る授業の「計画、実践、振り返り」サイクルの再考 教育実習に参加した大学院生は実践をどう位置付けたか, 言語文化教育研究, 10(1), pp 1-17
- 横須賀柳子 (2015a) ,職業探索段階の留学生によるアイデンティティ変容ー日本企業でのインターンシップ参加者の事例からー, 言語教育研究, 5, pp59-77
- 横須賀柳子 (2015b) ,チーム実践共同体でのアイデンティティ資本の獲得ー日本企業でのインターンシップ参加留学生の事例からー, 桜美林言語教育論叢, 11, pp51-63
- 横須賀柳子 (2015c) ,外国人留学生のインターンシップ研修による学びー研修参加の目的, 評価,課題の分析ー, 接触場面における相互行為の蓄積と評価 接触場面の言語管理研究, 12, pp55-69
- 横須賀柳子 (2017) ,外国人留学生のインターンシップ参加を通したキャリア探索, グローバル人材育成教育研究, 4, pp31-42
- 横溝紳一郎 (2000) ,日本語教師のためのアクション・リサーチ,凡人社
- レイヴ, J, ウェンガー, E 著, 佐伯胖訳 (1993) ,状況に埋め込まれた学習ー正統的周辺参加ー, 産業図書
- 渡辺三枝子・鹿嶋研之助・若松養亮著 (2010) 学校教育とキャリア教育の創造, 学文社
- 渡辺三枝子 (2014) ,キャリア, キャリアデザイン支援ハンドブック, 日本キャリアデザイン学会監修, pp5-6
- 渡辺三枝子編著 (2018) ,新版キャリアの心理学第2版 キャリア支援への発達のアプローチ, ナカニシヤ出版
- 割澤靖子 (2015) ,臨床実践に関心をもつ大学生の小学校におけるボランティア体験の意味, 教育心理学研究, 63, pp162-180

- Bandura,A. (1995) self-efficacy in changing societies.Cambride, UK, Cambridge University Press
- Cranton,P(1992) working with Adult Learner. Toronto: Wall& Emerson
- Jean Lave , Etienne Wenger(1991)Situating Learning: Legitimate Peripheral Participation
- Lave,J & Wenger,E (1991) Situating learning : legitimate peripheral participation New York: Cambridge University Press.
- Morita, N. (2004) Negotiating participation and identity in second language academiccommunities. TESOL Quarterly, 38(4), 573-603.
- Savickas,M.L.(2011)Career counseling:Washington DC.American Psychological Association
- Super,D.E. (1980) A life-span, life-space approach to career development, Journal of Vocational Behavior, 13, pp282-298
- Wood, D., Bruner, J.S. & Ross, G.(1976) The role of tutoring in problem solving. Jurnal of Child Psychology and Psychiatry 17, pp.89-100.